**№36　テーマ『人間として本物とは何か』**

**講話日2013年2月1日**

**皆さんこんにちは。今日は今年最初のセミナー、講演なんですけど、いろんな意味で人間性というものがもう一次元成長しないと、あらゆる問題を解決しないという状況に人類はあります。今出てきている問題というのは、すべて今の人間性がゆえに出てくるという課題ですので、人間性が成長しないと今の問題は解決できないという考え方ができるわけですね。そういう意味でもう一歩人間性を成長させるためには、どういう努力が必要なのか、これが非常に大きな人類史的課題と言うことができます。人間性をどのように進化・成長・発展させるかということは、今の人間にとっては大事な課題だということですね。そういうことから今日は、『人間として本物とは何か』ということを考えてみたいと思います。**

**人類史というのは、基本的に人間性の自覚史だと言われています。人類が歴史をつくっていくプロセスを通して、人間性というものはだんだんと進化していった。ということは、人間の可能性というものは、すでに生まれながらに命に遺伝子として与えられていて、それが各時代の問題というものに対応して、問題が潜在する能力を引き出していくという形で人類史はだんだんと発展・成長していく…という流れになっているわけですね。そういう意味において今我々は、自分自身のことを人間だと思っているわけですが、でも、本当に人間というものがどういうものなのかということを、命に生まれながらに与えられている可能性である遺伝子・潜在能力というものが、すべて顕現して人類の成長・発展が止まったという状態において初めて、人間はどのようにつくられていったのか、すなわち人間という命をつくった母なる宇宙がどういう思いを託したのかが、ハッキリする。その時点で初めて人間というものはこうだ、と言えるという結果になるわけであります。ですから、今我々はある意味で人間になる道を歩んでいるという理解の仕方ができるわけなのであって、今の我々の姿をもってして人間はこうだ、と判断するのは原理的にできません。人間が持てる潜在能力をすべて出し切って初めて、人間はこうだったんだと言える。そういう意味においては、我々は人間であるのはどうあることなのか、人間になるのはどうなることなのかを常に意識しながら、人間としての本物の在り方を求めていく必要があります。そこに人間としての誠実な生き方があるんじゃないかと思われます。**

**人間には、本物とニセ物の区別があると、そういうことを考えてみる必要があります。我々は常に本物の人間になろうとして生きる姿勢が大事なのであって、それが不完全な人間における謙虚な生き方になってきます。我々は人間であるのはどうあることなのか、人間になるのはどうなることなのかという問いを持って時代を生きる。そして、人間としての本当の在り方を求め続けていく…そこに人類史というものが、本物の人間になるプロセスという意味を持ってきます。**

**こういう人間観というものは、あまり日常生活の中では考えてみたことはない方が多いと思うのですが、けれどもこういう問題意識というものが学問として人間学にはあると、知っていただくことも皆さんが高い見識を持って仕事をし、お客様と接するときに何かしら役に立つはず。そういう意味で自身の見識を高めるために、自身の精神レベルを成長させる…そういうことに話を聞くことが関係すると考えています。**

**まず、「人間には本物とニセ物がある」と言わなければならないか。普通に考えれば、「人間に本物とニセ物があるのか？」「皆、本物のはず」となるのが、一般常識かと思います。にもかかわらず、人間には本物とニセ物と区別が付けられる。また、そう意識しないと本当に人間として成長する生き方はできないと考えなければならない。その根拠として考えなければならないのは三つありまして、第一番目は〈命には形がある。形は内容の表現である。〉ということ。**

**これはどういうことなのかと言うと、人間は自分でつくったものではない。独特の命の形というものを与えられて我々は生きているということ。なぜ、この形になっているかということを考えてみると、どんな生き物も、能力や力、本質など、その命の中に込められた要素が表現されて形ができているということができる。そのことから、形は内容の表現であると言われるわけであります。ですから、内容が変われば形が変わる。機械でもその個体に新しい機能が付け加えられると、必ずその個体の形は変わってくるわけです。何ゆえにその形にならなければならなかったのか、その必然性は内容によって決められるということです。つまり、形と内容は一体不離の、必然的な関係があると。であるから、人間も人間としての独特の形を持っているわけですから、人間の命の形に相応しい内容というものを持たないと、その形における本物性は出てこない。その形に相応しくないものを持っていたのでは、ニセ物ということになる。これが、形は内容の表現であるの説明になります。**

**今は個性の時代で、どういう個性も人間性も認められるという流れがありますから、「こうでないとダメ」というものがありません。ですから、「どうでも良いのでは」と思われがちですが、個性とは別に人間としての基本的な在り方を考えて生きる必要があると、そこに人間としての本物の内容が出てくるわけであります。とにかく、人間には本物とニセ物がある区別の第一番目は、人間という命の形に相応しい内容を持っているかどうか。そこに本物とニセ物の区別の根拠があると、考えてみてもらいたいと思います。母なる宇宙は、この人間の命の形にいかなる期待を込めたのか。命は母なる宇宙の願い、思い、期待を表現しているのか。それを知ることによって、我々の人間としての生き方というものがハッキリと見えてくるわけです。**

**これらを考えず、「どうでも良いじゃん」となってしまっていては、それは人間として無自覚な本物ではない生き方をしていることになるので、そういう意味でも我々は、常に人間であるとはどうあるべきなのか、母なる宇宙はこの命に何を込めてつくったのか、自分の命の形から母なる宇宙の願い・祈り・目的を知ることを人間は、していかなければなりません。とにかく、命の形というのは自分でつくったものではない。与えられて我々は生きているわけですから、命の形をつくった宇宙の摂理の力、母なる宇宙の意志を命から受け止めていかなければならない。そうしないと母なる宇宙の期待に応える、人間として正しい・本物の生き方を実現することはできません。これは命を理解する上で非常に大事な原理ですので、よく理解してもらいたいと思います。命は特定の形を持っている。だから、その命の形に相応しい内容とは何かを常に我々は問い、求めていかなければならない。そのために人間であるのはどうあることなのか、人間になるのはどうなることなのか、そういう問いを持つ必要があります。そういう問いを持っていなければ、ニセ物だ。持っていれば、人間としての自覚を持っている本物だ。そのように言うことができます。**

**ですから、皆さん方おひとりおひとりに「俺の命にいかなる願いが込められているか」…そのことを知ることで、自分がこの時代に生きて果たすべき使命がハッキリと見えてくることになります。自分に与えられた使命、または天命、あるいは天分（一人ひとりに独特に与えられている天から分け与えられた力）はなんなのかが考えられるわけですね。人間には皆、独特の力・才能が与えられており、他の人間にはない独特の力である天分があります。そのことを証明するのが顔であります。顔の形は全人類、皆が違う。生まれながらに遺伝子によって決められています。そして、我々は与えられた顔の形を生きなければならない。そこに個性を実現する生き方が始まるわけであります。**

**顔の形が違うということは、「自分には他の人間にはない、独特の才能・能力があるんだ」と。なぜなら、顔の形を決めるのは遺伝子。遺伝子とは、これは最近のヒトゲノムの研究で判明していますが、能力が物質化したもの。顔の形は全人類、皆が違う…ということは、「俺には俺にしかない独特の才能がある」ということを表現、宣言していることになる。「顔とはなんなのか」と考えたことはあるでしょうか？ そういう問いはあまり日常的ではないかもしれませんが、世界に唯ひとりしかないということは、自分にしかない才能があるんだということを教えてくれているんだと我々は、考えなければなりません。**

**この天分というものも我々がつくったものではない。生まれながらに母なる宇宙が自分の命に与えられている力です。この時代に生まれてきたからには、この時代において使って人生を生きなければならない。命に与えられている自分独特の力を使って、自分の人生を生きていく…そこに母なる宇宙の期待が命に込められている。言ってしまえば役割とも。ですから、「母なる宇宙は一体なぜこの時代に自分を誕生させたのか」「何をするためにこの時代に送り出されたのか」そのことを知るのがこの時代に生み出されたことを理解することになります。そして、天分を発揮してこの時代を生きれば、それが母なる宇宙の期待に応える人生ということになり、そこに本物の人生の生き方が出てくるわけであります。母なる宇宙の期待に応えないような、またそれを意識せず生きるようなことは、ニセ物の生き方になります。そのように考えると、確かに人間には本物の生き方とニセ物の生き方・人間がある・いると考えられると思います。とにかく、命には形がある。形があるということは、その形に相応しい内容を持たないといけない。相応しいものを持っていれば本物。相応しくないものを持っていたらニセ物。そういう判断をしなければならない。**

**続いて、二番目の根拠は、よく〈人の皮を着た獣〉と言う言い方をすることがありますが、人間でありながら人間に相応しくないような内容を持っていると、形は人間だけど内容は違う…それを人の皮を着た獣と言います。人間の形を持って生まれてきますけど、育てられ方によっては形に相応しくない内容を持ってしまう可能性がある。そういうときに人の皮を着た獣という言い方がされます。人間は遺伝子によって支配され生きていると遺伝子学では言うことができますが、実際人生は生まれた後に何を体験・学び・どう育てられるかによって変わってきます。ですから、生まれた後の教育、成長の環境は人間にとっては大事になる。人間として本物とはなんなのかを意識しながら、本物になれるような教育の仕方を考えなければならない。そういう必要性が出てくるわけであります。間違った教育、育てられ方をすれば、結果として人間に相応しくないような言動、振る舞いをする人間になってしまう。教育的観点からも人間として本物とはなんなのかを知って、知りながら育てることも大事になります。また、自分自身もそうなるように努力することが必要になります。そういうところからも、人間には本物とニセ物があると知る必要があります。**

**第三番目は、〈人間の格〉。人間というのは人格を持って生まれてくるわけではない。生まれてくるときは、動物学上の人間、つまりは動物として生まれてくる。生まれた後に自らの努力、社会の中で教育を受けて育てられて、だんだんと人間の格を獲得して成人になる…そういうのが人間の道筋であります。そういうことを考えると、人間になるとはどうなることなのかを知って、人間として本物とはこういう内容を持っているんだということを知って、そうなるように努力しないといけない。そう順序立てるとしっかりとした判断ができるようになります。人間として深い自覚に基づく生き方と言えるテーマです。そういう思いを持って生きている方とそうでない方では、人間としての深みが違ってくる。軽薄な軽々しい人間性と深い重みのある人間性の違いは、今申し上げたことを自覚しているかどうか。それによって人間としての価値、値打ちの違いが出てくる。**

**そのように人間に深い自覚をつくり出すのが、哲学というものの学問の必要性であります。しっかりとした信念を持って人生を生きていく上で大事なことで、そういうことを持っていないと時代のさまざまな状況に振り回されて、自分の人生を自分でつくっていくという意志に基づいた生き方ができなくなってしまう。案外とそういう方が多い気がします。仕事をしていても「まぁ、適当にやっていてもなんとかなる」と、真剣味のない、熱の入らない人も見受けられます。そんな無自覚な生き方をしているようでは、人間としてはニセ物だ。ちゃんと自分の生きる目標というものを立てて、その目標に近づいていけるよう努力することに人間としての本物の生き方がある。常に人間であるとはどういうことなのかを考え、「こうあることなんじゃないか」という答えを持って、その答えに近づいていけるようにする。ぜひ、人間であるのはどうあることなのか、人間になるのはどうなることなのかという問いを持つ大切さを感じてもらいたい。**

**そして、自分自身で答えをつくり出しながら、その答えのようになれるよう努力する…そこに本物の人間の生き方、道筋が生まれてくるわけであります。そういうことをちゃんとすれば仕事においても、お客様への対応においても、人の道に外れない温かな心遣いを忘れない、美しい生き方をすることができるようになっていくのではないか。そうしていけば、お客様からも「この人は他の人とは違うな」と思ってもらえて、だんだんと本物になっていくと思います。どんなことでも必ず問いを持つことによって、成長というものが確実に出てくるわけであります。「人間として本物とはなんなのか」という問いを持つことを覚えておいてもらいたい。すべての人間の言動の中に問いが息づいているような生き方をぜひしてもらいたい。人間であるのはどうあることなのか、人間になるのはどうなることなのかが、本物の人間としての成長の道筋をつくることになっていきます。**

**具体的に人間が本物といえるような内容を持つためには、今の人類の進化の段階においてどういうことが言えるか。問いだけあって答えがなければ、努力のしようがないですから。どういう努力ができるかも考える必要があります。それを考えるためには、「一体人類はどういう風にして動物から飛躍的に進化して、今のような人間、生き方をするよう成長したのか」が必要。そこから人間として成長するためには何が必要で、何が求められるのかがわかってくるわけであります。**

**人類は猿類から進化して人類になったと言われていますが、猿の生き方と人間の生き方の間にはどのような違いがあるのか。これを学門的に考えると、文化人類学、人類考古学という分野で研究されています。人類史と言っても約400万年くらいの歴史があって、…これは現在の人類考古学の定説なのですが、研究の実態から言うと、約800万年前から猿類から進化した人間の骨が出てきたという人類学者もおりますし、さまざまな見解がいろんなところから述べられています。一応、まとめると今の時代においても疑いのない事実として承認されている定説は、人類の歴史は約400万年と言われています。**

**それで、人類史約400万年の380万年は、人間であっても動物と同じような次元で生存競争をしていた旧人と言われて、現在のような自覚を持った生き方をするようになったのは約20万年前からだと言われています。まだまだ全体から見ると浅いわけですが、この約20万年前に何があったのか。その頃から人類は神を意識して生きるようになった。すなわち超越的存在を意識しながら生きる状態になって、原始宗教を文化としてつくり始めたと言われています。なぜそう言えるのか、人類考古学から言うと、今より約20万年前の地層から出てくる人骨には、宗教的儀式をして人を葬った形跡が全くない。しかしそれ以降の地層からは、宗教的儀式をして人を葬った形跡がある。これはエポックメイキングというか、明確な違いなんですね。それでこれが何を意味するかということなんですが、約20万年前から人類は超越的存在を意識し始めて、それを意識しながら生きることを始めたと、文化人類学では言っています。そういうところから、人類が初めにつくった文化は、原始宗教だと言われるわけです。原始宗教を具体的に持つことによって、人類は自分たちは動物とは違う、独特の存在だと意識して生き始めたわけです。**

**原始宗教を持つことによって、どういうことが起こったのか。人間よりも高度な存在があるという意識になって、神や仏と後に言われる超越的存在を意識することでどうなったか。今から約20万年前はまだまだ地殻変動が激しくて、あちこちで火山が爆発したり、地震があったりなど非常に不安な状況だったと。そういう時代…いわゆる「はじめ人間ギャートルズ」のような時代。その頃に人間は「なぜ、このようなことが起こるのだろう」と考え始めたんです。動物の段階ではあまりそういうことは考えないのですが、だんだんと人類として進化する状況になって、理由を考え始めた。そして、「目には見えないが、俺たちよりももっと凄いやつがどこかにいて、そういう存在が火山を爆発させたり、地震を起こしたりしているに違いない」と考えることに。これは、擬人的類推という方法で人類は自然現象を理解しようとした。「自分たちでは火山を爆発させるとか、地震を起こすということはできない、だから、もっと凄いやつがいる…」と。そういう理解の仕方をし始めたのが、約20万年前から。これが動物とは異なり、超越的存在を意識し始めた理由になります。なぜそういう考えになったかと言うと、数々の自然現象がどうして起こるのかがわからないと不安でしょうがないから。わけがわからないことが起こることほど不安で恐ろしいことはない。だから、なぜ起こるのかを知ろうとした。知る方法として用いたのが擬人的類推。人間が日常的にやっている言動を原理にして自然現象を知ろうとする、理解しようとしたわけです。**

**そのことによってどのようになったのか。人類は原始宗教をつくる中で、目に見える背後に目に見えないものが存在する。目に見える世界は目に見えないものによって世界は支配されて、動かされているんだ。我々は病気になったりするのは、目に見えるものの背後にある目に見えないものの力による仕業なんだと考えて、目に見える世界は目に見えないものによって支配されていると。目に見えるものの背後に目に見えざるものがある。そういう独特の意識を持つようになった。これが人類が動物から独立して、文化をつくり出すことができるきっかけになった。人間が人間になるには、目に見えるものに支配されていてはならない。人間が人間になるためには、目に見える背後に目に見えざるものを見る…この力が人間を動物から飛躍的に進化させて、今我々が自覚している人間という高度な精神性を持った存在が誕生したんだ。**

**そういう意味では人間である限りは、目に見えざるものを意識するという精神性が人間というものをつくる、生きるためには必要だということです。目に見えざるものというのは、未来だとか理想とか夢、希望を持って生きるということ。これは人間にしかできません。物事の本質とか法則を意識しながら現実を生きる。または過去を意識しながら現実を生きる、亡くなってしまったご先祖様を思いながら現実を生きる…これが人間独特の文化をつくるわけです。そういう意味で人間として本物という生き方をすることができる前提条件として、目に見える背後に目に見えざるものを見る。人間的な心というものが生まれてくる原因であります。人間らしい心というのは、目に見える背後に目に見えざるものを見ることによって生まれてくる。**

**昔から陰膳のハエの心ということが言われていて、仏様・ご先祖様にお供えしたごはんにハエがたかったときに、つい手で払ってしまう。また、ハエがたかったようなごはんを仏様・ご先祖様に食べてもらうのはいけないと思って、ついついハエを払ってしまう…ここに人間らしい心というのはあるんだと、昔から言われています。実際問題、仏様・ご先祖様がそれを食べるわけではないんだけど、お供えしたものだから申し訳ないという気持ちになる、それが人間。これもやっぱり、目に見える背後に目に見えざるものを見ることによって、そういう行動が出てくるということ。そういう意味で日常生活においても、いろいろと人の心を推し量ったり、心遣いをしたりして生きるというのは、目に見える背後に目に見えざるものを意識しながら現実を生きている証。**

**ついつい無自覚であると目の前の問題や悩みに振り回されて、人間としての本当の生き方を見失って、動物的な生き方に堕落してしまう。今、安倍政権になってようやく、アベノミクスなど新しい経済政策が出てきて、日本は未来に希望を持てるような状況がつくられてきましたけど、それまでは目の前の状況に振り回されて問題に悩んで、まったく未来に希望を持てなかった。動物というのは、与えられた現実にどう対応し、どう適応するか。しかし人間は、与えられた現実をどう素晴らしいものにするか、どう変えていくかという生き方をするところに人間的な生き方の基本があります。動物は夢や理想、希望、目標というものを持って現実を生きない、だけど人間はいかにそれらを素晴らしいものにしていくか。そうすると、文明や歴史、文化がつくられていく、そういう力が出てくる。人間が人間的な生き方をしようと思ったら、常に与えられた現実をどう素晴らしいものにするか、どう変えていくか。そのためには、未来に何かしらの夢や理想、希望、目標をつくらないと、今をより素晴らしいものにしていくという生き方を現実にし始めることはできません。**

**だからこそ、会社でも事業計画を立てて、目標をつくって現実を目標に近づけていく。それが会社の健全な経営の仕方であります。だけど、経営者の力が充分でないと、目の前の問題に煩わされ、振り回され、問題にどう対処するかばかりで、問題の連鎖から脱却できない。苦しい経営をする、社員を苦しめる、会社がなかなか立ち直れない…そういう状況になってしまっている会社も随分あります。しかし、目の前の問題から脱却して会社を発展させようと思ったら、目の前の問題にとらわれることなく、常に未来に理想と目標を掲げて、今何をするべきかを判断して現実を生きる。そうすれば、目の前のさまざまな問題の中でもどういう問題が重要で、放っておいても良い問題かの取捨選択ができる。未来を見つめながら現実を生きる経営が始まるわけであります。**

**これから我々が目指すべき日本の未来の姿を明確に掲げて、その状態になるように今何をすべきかを考える・考えられる政策がようやく始まりました。これが安倍さんが言われるような形に財政が一般企業の活力に浸透していって、どんどん雇用が増えて利益が上がる状態になっていくかは、これからの実践によって決まる。どういう風に国を動かすかの理想・目標が一応出てきたことに我々は未来への明るさを感じているわけです。理想や目標を持つことによって、我々は問題の連鎖から脱却して、希望ある生き方・経営をすることができるようになっていくわけです。とにかく、動物と人間の大きな違いは、与えられた現実にどう対応して適応するかだけ。問題に振り回されて、問題がなければ何もしない…これでは動物的な次元における経営であって、人間的な価値ある経営ではありません。人間的であろうと思えば、常に未来に目標を掲げて、それを実現するために何をするべきか。その観点から問題を取捨選択する。それにより、人間的な未来思考の価値ある生き方、経営が生まれてくるわけであります。そういうところから人間としての生き方が始まってきたわけです。“目に見える背後に目に見えざるものを見る”この言葉も大事なものですので、覚えてもらいたいと思っています。**

**そうして人類は動物の次元から飛躍的に進化する道筋ができてきて、具体的に原始宗教という文化をつくり出しました。原始宗教を持つことによって、ようやく人間として価値ある生き方は何かを知ることができた。どういう人間性、どういう内容が命の中に求められるのか。すなわち、本物の人間になるためには何が大事なのかが見えてきた、つくられてきた。原始宗教を持つことによって、神や仏という超越的存在を意識し始めた。そこから、「俺達は神や仏ではない、絶対的存在ではない」という自覚が生まれた。それにより、人類は有限で不完全だという自己認識が生まれてくることになりました。**

**そういう意味で人間が本物の人間として生きる上で一番大事なことは、不完全性の自覚を持つということなんです。あらゆる意味で人間は不完全だ、決して完全・絶対ではない。この自覚を忘れたら、人間であることに根底から失格することになる。これを自覚することで、人間という価値ある生き方がつくられてきたわけであります。**

**なぜ、不完全性の自覚が本物の人間になるための第一条件と言えるのか。自分は不完全だと意識できるのは人間だけであって、神にも動物にも不完全性の自覚というものは持てない。神が持つならば完全性の自覚でなければならない。では動物は？ 人間同様、存在論的には不完全なのですが、動物は自分が不完全だということを知らない。また、不完全というのは完全というものを意識できることでしか、不完全という意識を持てない。動物は完全なものを意識する理性を持っていないから、自分が不完全だということを知らない。だから、動物は不完全性の自覚はない。このように人間にしか持てない不完全性の自覚を持たずして、どうして本物の人間と言えようか。これが根拠になります。不完全性の自覚ほど人間にとって根源的に大事なものはない。**

**だけど、不完全性の自覚が単なる自覚のまま終わったのでは、意識だけですので単なる観念で終わってしまう。人格というのは観念ではない。人格は身についたものでなければならない。観念ではなく、肉化して身について自分のものになったらどうなるか。そうすると、謙虚さがにじみ出てくるという構造ができます。本物の人間になるには、単に不完全性の自覚だけではダメ。不完全性の自覚からにじみ出てくる謙虚さが大事。それによって初めて不完全性の自覚は体得され、肉化され、身について、そして本物になったと言えます。そういう風に考えると、謙虚さが本物の人間にとって一番大事な意識だと言える。人間は、傲慢になったとき、慢心が生まれたとき、人間は人間であることに根底から失格することになる。傲慢さほど恐ろしいものはない、傲慢さほど醜いものはない。**

**決して「謙虚にしなくちゃ」ということではなくて、傲慢であってはならない、ということを自分自身に常に常に言い聞かしていないと、常軌を逸した傲慢さ、醜い態度が出てきてしまう。不完全性の自覚からにじみ出てくる謙虚さを持ち続ける努力をする必要があるわけであります。人間性をつくる第一原理は不完全性の自覚からにじみ出てくる謙虚さ。不完全性の自覚は人間にしか持てない。これを持たずしてどうして本物の人間と言えるのか。**

**では、具体的にどうすれば謙虚さがにじみ出た、身についた、肉化された状態と言えるか。「謙虚にしなくちゃ」と思っている段階では謙虚さは身についていない、観念のまま。仕事においても、お客様には謙虚で親切にしなくてはならない、と言い聞かせていると、ついついお客様でないとわかり次第、傲慢さが出てきてしまう。急に変身してしまう人がいるんですよね。これは謙虚さが身についていない、謙虚さを商売の道具、飾りにしている。謙虚さは飾りじゃない。命から謙虚さがにじみ出てきて本物だということができる。では、どうすればにじみ出てくるか。どうしたら本物の謙虚さを持てるかの方法論を考えなくてならない。それにはふたつの原理がある。**

**ひとつは、人間には誰しも長所半分、短所半分だということを知る。**

**どんな立派な人間にも必ず短所はある。他人から見たら「嫌だな」と思われるところ、軽蔑されるようなところが、半分はある。人間性の半分は短所。人間性は長所半分、短所半分という構造でできています。では、なぜそのように考えられるのか、その根拠はなんなのか。学問というのはすべからく「なぜ、そうなのか？」ということを明確に語れるものです。根拠を明確にすることが学問の力、役割なんです。なぜ、そのようなものが必要かと言うと、それは人間が自信を持って人生を生き、発言をし、行動するために、根拠を明確に語る学問がつくられてきたわけであります。どうも確信を持って行動ができない、行動力がない、実践力がないと言われる人は、その人が持っている知識や技術の中に、明確な根拠が意識されていないことが原因の場合が多いです。根拠が明確になれば誰でも臆することなく行動・発言することができます。自信が湧いてきます。自信をつくるために我々は学問をしなければならない。学問によって根拠を明確に掴めば、我々は勇気を持って発言・行動することができる。できる人間になれる。行動力や実践力をつくっていこうと思ったら、学問をもって根拠を明確にすることが大事な課題であります。**

**なぜ、人間には長所半分、短所半分という構造があると考えられるか。人間もこの大宇宙の中に存在するひとつの命であるから。我々もこの大宇宙の一部分なんです。ということは、我々も宇宙なんだ。宇宙は我々の外にあるんじゃない、我々自身が宇宙の中にあって、宇宙の一部分を占めているんです。では、宇宙とはなんなのか。これはプラスのエネルギーとマイナスのエネルギーが半分ずつあって、そのエネルギーがバランスを模索しながら宇宙の秩序をつくっているのが、基本的な姿であって、それを宇宙の摂理と言います。高校の物理学の教科書から言うと、宇宙とはエネルギーバランスだと書いてあります。バランスをとって、あらゆるものをつくっていくっていうのが宇宙の在り方なんですね。そういう力で宇宙は万物をクリエイトしましたから、だから基本的に宇宙の構造は、プラスとマイナスが半分ずつあるという構造で全部できてるんですね。調和作用、平衡作用、バランス作用…そういうものが宇宙に存在するあらゆるものの基本的な働き、生き方になっています。星がなぜ丸くなろうとするのか。それは三次元という空間の中でバランスを追求していくと球体になっていく、という原理によるもの。星も常にバランスを追求しながら存在しているんだと。**

**人間も生命を保つ生命維持機能というのは、すべてバランスで成り立っています。空腹満腹もそうです。健康な状態でも常に血糖値でも栄養素でも「この範囲なら健全」というものがあって、その範囲でバランスをとりながら命を維持しているのが、生命維持機能というホメオスタシスという働きであります。また、人間は左右バランスのとれた、左右対称に近い形になっていて、歩くのもバランスをとって歩いている。そもそも体の構造がバランスをとることで成り立っているわけであります。どんなものでもバランスの働きというものがあるわけですね。バランスをとろうと思ったら、必ず相反する原理があって、対立しないで協力し合って働くことによってバランスをとる、という構造が生まれてくるんですね。だから、宇宙にはプラスがあってマイナスがある。陰には陽があるし、また光には影があるし、善には悪があるし、美には醜があるし、真には偽があるし、清には濁があるし、男には女、動物には植物、全部一対という対構造で宇宙は出来上がっている。これが、すべてのものは宇宙の摂理によってできていることの証明であります。**

**だから、人間の命も宇宙の摂理によってつくり出されたものだと言えます。そして、人間は長所半分、短所半分である。長所も短所も存在するものであって、なくならない。人間にとって短所はものすごく大切なもの。なぜなら、人間の本質は理性ではなく心だから。人間らしい心というのは謙虚な心だ。人間らしい心という謙虚な心をつくるのは、長所ではなく短所だ。短所がなければ人間を謙虚にする理由がない。短所があるがゆえに謙虚にするという生き方が出てくる。人間らしい心をつくってくれるのは短所なんだ。短所があってこそ人間。短所はどんな人間にでも半分はある。また、半分もあって良いんだ。長所半分、短所半分というのが基本的な原理です。長所を伸ばして自信をつくり、短所によって謙虚になる。自信と謙虚さが一対となって現実を生きる力となる。自信だけでは自信過剰になってしまう。却って自信過剰が非難されるもとになり、傲慢になってしまう。また、謙虚さだけでは弱さになり、媚びへつらうことになる。自信と謙虚さが一対となって初めて人生を正しく生きる力が持てるんだ。その意味でも我々は長所半分、短所半分という構造が大事なんだと言わなければなりません。長所も短所も活かしきって生きる、ここに本物の人間として生きる基本があるんだということです。**

**長所を伸ばして自信をつくり、短所によって謙虚になる。自信と謙虚さが一対となって現実を生きる力となる。ここに生き方の基本があります。常に自分の中には他人から非難され、軽蔑され、嫌がられる部分が半分はある、そういう自覚を持つことで傲慢にはなれないという意識が生まれてくることになる。そこから謙虚な生き方ができあがってきます。だけど、謙虚さだけでは生きられないから、長所も大事。長所も伸ばして他人から一目置かれる。長所を伸ばすのは威張るだけではない、人の役に立つためだ。人の役に立つためには自分の長所、自分の独特の力をできるだけ磨いて、伸ばして成長させていかないといけない。ゆえに自然に謙虚になれる・できる・にじみ出てくる状況に成長できる。**

**もうひとつの謙虚になれる原理は、理性の使い方。**

**まだまだ今の人々は理性的に傲慢すぎる。自分の考えと違うことを言われるとムカついて、相手を説得したくなってしまい、命令的、支配的になってしまいやすい。考え方が違うと、価値観が違うと一緒にやっていけない。“違う”ということが戦争・対立の原因になってしまっていたりする。それは、理性的な傲慢さに原因がある。そういう意味においては、人間性を持って生きていこうと思ったら、理性も不完全なんだと知る必要がある。近代人は人間の本質は理性と考えて、人間の持っている能力で信頼できるのは理性しかないんだという理性信仰に基づいて、あらゆる事柄を理性を原理にして処理するということをやってきました。その結果、人間性が破壊されて自然も環境も破壊され、さまざまな問題に苦しむような状況がつくられてきたわけです。理性で合理的に物事を処理することで自然や環境や人間性が破壊されることになってきた。そのことによってようやく我々は、本当に理性を信じて良いのか…という反省が生まれてきた。これを理性の揺らぎと言っているんです。ようやく人類は理性に対する絶対的な盲信から脱却し始めた。理性の絶対性が揺らぎ始めたという状況にあるわけです。**

**では、これから我々は理性をどのように考えたら良いのか。理性は合理的に考えるときに最適な能力ではあるが、有限で不完全な能力といえるものと、自覚しなければならない。理性的に考えるということは、あらゆることを合理的に歪めてしまうことになる。理性的には正しいけれども、あらゆるものが合理的に歪んでしまう。それはつまり、あらゆるものが有機性を破壊されるということ。理性的に考えた答えによって自然に対応することで自然の有機性が破壊され、自然破壊に繋がってしまう。または環境破壊が起こる。理性的に、合理的に考えたけれども、それが環境破壊になってしまう。**

**科学というのは自然というものをたくさんの分野にぶった切ってしまう。物理学は物理的現象しか問題にしない、化学は化学的現象しか問題にしない、心理学は心理学的現象しか問題にしない、生物学は生物しか問題にしない…いろんな分野に細かく分けて自然を研究する。自分たちが研究した分野の法則・考え方が、他の隣接する領域にどういう影響を及ぼすかをまったく考えていない。それぞれの分野において真理だと言われるものを研究・発表して、ノーベル賞を貰っている。ということは科学は原理的に言って有機的に絡み合って動いている自然をぶった切って研究する…だから、自然の有機性を破壊するんです。繋がりを壊してしまう。現実とはすべてのものが有機的に絡み合って動いているんだ。だけど科学では、物理学が生命にどういう影響を及ぼすかまったく考えられていない。西洋医学はある臓器を手術して取ったら、命全体にどういう影響を及ぼすかをまったく考えていない。そういう機械論的な仕方で対処療法的に病気を治そうとする。だけど、命全体にはいろんな悪影響がでてくることを考慮しない。これも有機性を破壊することになっており、科学的な考え方の大きな問題点でもあります。**

**どうして理性、科学は人間性を破壊するのか。人間には理性も感性も肉体もあり、それぞれが有機的に絡み合って生きており、人間の命はそれによりできている。それぞれで出来上がっているものを理性だけで判断して、「これが合理的だ」と言って判断する…そうすると結果としてそれぞれの有機的な繋がりを破壊してしまって、合理的にしか理解されないような命の状況になってしまう。それにより、温かな心や理屈を超えた思いやりができなくなってしまう原因であります。理性は完全ではない、合理的にしか考えられない有限で不完全な能力なんだと、我々は考えながら理性をどう使ったらよいかを改めて、考え直さなければならない時代に入ってきているということです。理性は不完全なものだということも、人間が謙虚に生きるために必要な大事な原理であります。**

**ここで休憩に入ります。どうもありがとうございました。**

**後半の話に入ります。**

**理性は不完全な能力だと話しました。理性は不完全だと自覚されることで、自分が正しいと思っていることも完全ではない、絶対ではないという自覚が出てきます。結果として自分とは違う考え方にも興味を持って、そういったものを取り入れながら、自分の考えをより良いものに成長させようという謙虚な対応の仕方が出てくるわけであります。**

**よく偏見というものを「偏見があってはならない」と世間でも言いますが、人間というのは偏見から脱却できないんです。どんな人の意見も偏見と言うことができる。人間は肉体を持っていますから、持っている限り、その肉体がある場所からしか物を見ることができないし、その場所でしか考えられないし、その場所でしか判断もできない、という限界がある。ですから、どんな人間の判断も肉体がある限り、その立場においてどう判断できるかの限界がある。だから、偏見からは脱却できないと考えておかなければならない。**

**「ならば偏見があって良いのか？」ということになるんですが、一人ひとりの考えは偏見なんだけれど、仏教には「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があります。社会とは一人称二人称三人称という構造で成り立っておって、自分の立場から見たらこう見える、相手の立場から見たらこう見える、第三者の立場から見たらこう見える、三つの考えを統合することによって、初めて生きた社会の現実がわかる。これが、学問的に生きた現実を把握する場合の方法論であります。これからの時代の生き方においては、自分がどれだけ正しいと思ってもそれも偏見に過ぎない、ということを考えなければならない。**

**偏見というのは、決して間違っているということではない。正しいけれども偏りがあるということ。偏りをどう乗り越えていくかを考える必要がある。自分の考えというものをより正しい方に近づけようと思ったのならば、自分と違う二つの考え方を持ってきて、三つの考え方を統合して、自分自身の最終的な判断、結論を下す。それが物事の対処の仕方になります。一人ひとりには限界があるが、三人の三つの違った考え方を統合すれば、文殊の知恵すなわち仏の知恵に近づくことができます。考え方が違ったら、どちらが正しいか決着をつけるという考え方ではなくて、対立を乗り越えて、自分とは違った考えを参考にして、自分の考え・結論を出す、これが謙虚な理性というやり方・使い方なんですね。自分と違う二つの考え方を持ってこないと、偏りを修正することはできない。それが理性的な謙虚さをつくってくれて、謙虚さがにじみ出てくる人間になれるということです。**

**この二つが、現実的にいって謙虚さがにじみ出てくる人格をつくるための方法論であります。ぜひ、仕事においても活かして使ってもらいたい。人間の本物と言われるような生き方をするためには、不完全性の自覚からにじみ出てくる謙虚さを身についたものとして、自分が持てる状態にしていく必要があります。**

**次、第二番目の本物の条件は、〈人間としての成長意欲〉。**

**自分が不完全だと意識できるのは、完全なものを思い描くことによって成り立つ。つまり、「俺はそんな完全なものではない、だから不完全だ」と。つまり、人間は完全なものを意識することができる。そこに動物にはない人間の重要な力が生まれてきます。完全・完璧・絶対なるものを意識できることによってどうなるかというと、不完全でありながらも完全・完璧・絶対を求める。だけど、人間は原理的にいって不完全だから、決して完全・完璧・絶対にならない。不完全でありながらも完全・完璧・絶対を求める生き方をしようと思ったらできるというか、そういう意識が自然に必然的に出てくるという構造になっているわけであります。不完全でありながらも完全・完璧・絶対を求める…けれども、なれないというのが二番目の原理なんです。**

**このことをもう少し単純な言葉で表すと、“より以上”を求めて生きるということ。“より以上”を求めるところに、人間としての生き方の本物としての第二番目の条件があると言えるわけです。人間は何らかの意味で、“より以上”を求めることをしている必要があります。なぜか、“より以上”を求めて生きることは欲求が湧いてくる基本原理でもあるし、成長意欲の原理にもなる。“より以上”を求めて生きる生き方も人間にしかできない生き方。本物の人間であろうとするならば、“より以上”を求めて生きることを忘れてしまっては、ニセ物になってしまう。本物の人間である以上、“より以上”を求めて生きるということを目標にして、それに近づくことをしていなければならない。**

**“より以上”を求めて生きるのは、なぜ人間にしかできないのか。神様や仏様は完全な存在ですから完全かつ絶対。“より以上”を求めても、ないから。“より以上”を求めての反対である“より以下”となると、それでは神様や仏様ではなくなってしまう。では、動物は？ というと、人間と同じように不完全で有限な存在なんですけれど、人間のように思い描くことができない。だから、不完全でありながらも完全を求めることができません。動物は本能と遺伝子に支配されて固定化された生き方しかできません。人間だけが不完全ながらも完全なものを求めて生きることができる。“より以上”を求めて生きることができる。もっと良い家に、もっと良い車に、もっとお金持ちに…という、もっともっとという気持ちが湧いてくる。不完全ながら完全なものを意識できるがゆえに可能、ゆえに出てくる欲求であります。“より以上”を求めて生きるのは、人間独特の生き方である。この生き方をせずにどうして人間として本物と言えるのか。**

**“より以上”を求めて生きることをしようと思ったら、何が大事か。本物の人間として生きる上でどういうことが大事になってくるのか。まずは、理想がなければならない。目的、目標をつくらなければならない。それらに近づけていく生き方に人間的に価値がある生き方が生まれてくる。だけど、理想や目標を理性でつくってしまうと、我々は縛られて堅苦しい辛い人生が始まる。人間が人間らしい生き方をしようと思ったら、理想や目標を欲求として持たないと楽しい、生きがいのある人生をつくることはできません。欲求としてつくれば、自分のしたいことをする=だから楽しい人生。どうやって欲求としての理想や目標を持つか、それが非常に大事なことなんです。ついつい理性で理想や目標をつくってしまう。理性で計画をつくると、それを実践しようと思った瞬間からその計画に縛られて、堅苦しい窮屈な生き方が始まる。本当に自分が「こうしたい、こうなりたい」という理想や目標を欲求として持ったのならば、そうすることは楽しい、愉快だ、生きがいがある、情熱が湧いてくる。どうすれば命が喜ぶような理想を持つことができるかを考える必要があるわけです。**

**欲求といっても動物的な欲求ではなく、人間的に価値ある欲求というものを持たないと、人間として本物という生き方はできません。それには三つの問いがあって、自分が自分に対して「どんな人間になりたいのか、どんな仕事がしたいのか、将来どんな生活がしたいか」。理性を手段能力に使って、「どんな人間になりたいのか、どんな仕事がしたいのか、将来どんな生活がしたいか」を自分に問う。そうして命からどうなりたいかが湧いてくる。呼び覚ます、引っ張り出す。そうして、人間的欲求を自分自身がつくり出すんです。それぞれを問うて、答え=欲求を引っ張り出す。そのことによって、この目標を達成するためにはどうすべきか。それにより今の自分の生き方が決まる。人間的に価値ある欲求を命から引っ張り出す方法はあるんだ。欲求として自分が求める理想や目標を持つことができる。それを知らない人は理性で理想や目標・計画をつくってしまい、結果として理想や計画に縛られて、堅苦しい窮屈な苦しい人生を自分に課してしまう。それによって皆、病気になってしまう。命を苦しめればストレスが溜まって病気になって、生きる喜びを失ってしまう。けれども、欲求として理想や目標を持ったならば、したいことをするんだから、これほど楽しいことはない、健康になる。**

**とにかく、人間にしかできない、“より以上”を求めて生きるための方法論は、まずは理想や目標を定めなければならない。理性ではなく、欲求として持たなければ楽しい人生は生きられない。どうすれば、欲求としての理想や目標を持てるのか。その方法論は、理性を手段能力に使って自分の命に問いを発して、自分の命から命が喜ぶ欲求を引っ張り出してくる。その欲求を実現することが自己実現であり、生きがい・幸せである。とにかく、人間である限りはどういう人間になりたいのかを自分で決めなければならない。男であるなら、女であるならこういう男・女になりたいかを決めなければならない。決まらなければ、男・女探しをしないとならないし、そのために本を読んだり映画を観たり、いろんな人に会ったりして理想像を見つけて、それを欲求として持つことが出発点であります。人間としてのなりたい目標がなければ、結果として自分でもどうなるのかわからないとなってしまって、「まぁ、なんとかなる」と流れに任せる人生になってしまう。自分ながらにどうなるかわからない、これが迷い。本当に迷いなく人生を生きていこうと思ったら、何かしら明確な理想を自分で掲げなければならない。そのために我々は本を読んだり、演劇を観たり…。人間である限りは、どういう人間になりたいのかを自分で決めるということ。人間として本物になるというのは、本物をどう考えて、どうなれるかを考えて、どう生きるかが課題になってくる。この方法論は覚えておいてもらいたい。**

**そして、人間は時間的存在といって、生まれてから死ぬまでの時間をどう生きるかという存在なんだ。自分自身がどういう目標に向かって現実を生きるか。将来の目標をしっかりと立てることによって、今の自分が何をしないといけないかがわかる、決まってくる。「理想・夢は今を生きる力だ。理想といえども現実の只中」。今生きている人間が理想や夢を考えるわけですから。理想や夢があるから今を命を燃やして生きることができる。理想や夢があるからどんな苦しみも耐えられる。理想や夢がなくなってしまっては。今の辛さに押しつぶされてしまう。今を生きるために、人間は理想や夢を持たなければならない。目標を立てなければならない。そうしなければ今の自分の生き方が定まらない。理想や夢や希望も今を生きるために必要なんだ。**

**もうひとつは、問いを持って生きる、問題意識を持って生きる。問いを持って生きなければ、“より以上”を求めて生きる力が出てこない。問題も悩みもなければ、「今のままでいいじゃん」となって、成長をしません。問題や悩みを持つことが大事なんだ。問題は今の自分を成長させるために出てくるんだ。問題は会社を発展させるために出てくるんだ。問題は社会を発展させるために出てくるんだ。決して苦しめるために出てきていない。問題はあらゆるものを成長させるために出てくるんだ。問題を持っていることが大事なんだ。なくなったとき、成長は止まる。問題意識を持って仕事をすることが、打ち込めるようになる条件。問題意識がない人間は、言われたことをするだけの働かされる人間だ。だけど、問題意識を持つことによって、答えを求めて積極的に関わっていく。自ら働こうとして働くようになる。とにかく、問題意識を持って生きるということは、積極的に自分自身が主体的に仕事をする大事な原理であります。**

**浜松の駅を降りて地下道を進んでいくと、右手に“技術は永遠のロマン”と書いてあるんですよ。私は最初にそれを見たときに「すごい言葉だな」と思って感動したんですね。技術というのは問題を解決する力のことで、つまり“技術は永遠のロマン”というのは、言い換えれば問題はロマンなんだということ。問題こそ夢なんだ、問題こそ希望なんだ、問題があるというのは素晴らしいことなんだ、ということを語っている言葉なんじゃないかなと思っています。“技術は永遠のロマン”というのは、まさに日本を表す言葉。技術立国である日本を標榜していると思います。技術力によって世界の頂点を極めたのが日本の特徴なんですね。その技術力というのは、問題を解決する力なんだ。ぜひ、問題こそ夢なんだ、問題こそ希望なんだ、問題があるというのは素晴らしいことなんだ、という気持ちを持って生きてもらいたい。それが本物の証明だ。**

**問題を嫌い、避けて通ろうとするのはニセ物の生き方だ。人間の人生、会社を発展させるには、問題を乗り越え続けること。問題を恐れないというのが大事な成長発展の考え方なんですね。問題があることは素晴らしいことなんだ。そのことによって、答えを出すことに挑戦できる。問題があることが生きがいなんだ。今目の前にある問題はなぜ出てくるのか。今、社会や世界に出てきている問題は、次の新しい時代を生きるための力を命から引っ張り出すために存在する。人間が歴史をつくるということは、不可能を可能にすることなんだ。今自分が持っている力で不可能だと思うことを可能にしていくこと、それが歴史をつくるということ。仕事をするというのは、不可能を可能にすることなんだ。今できないことをできるようにしていく、そこに成長、仕事をしていくという本義があるんだ。その意味でも我々は問題を恐れてはならない、問題が出てこないことを願ってはならない。問題があることが幸せなんだ。問題こそ希望であり、夢なんだ、素晴らしいことなんだ。そういうことを心に留めておいてもらいたいと思います。問い、問題意識を持って生きることが本当に生きるということ。問題も悩みもないというのでは、何をして良いかわからないということになってしまって、今のままで良いとなって保守的になる。問題があるがゆえに未来がある。問題意識が大事なんだ。**

**人間は不完全ですから、問題がないことなんてない。常に問題はある。ないということはあるのに見えていないということ。どんな人間にも問題がある。なくなることはない。あることが正常で、ないことは異常。人間が健全な生き方をするためには、問題をわかっている、掴んでいるということが不完全な人間の正常な状態であって、ないことは現実が見えていないという証である。問題がある道こそ、本道である。問題のない道は、間違った道。成長のない道だ。我々は問題を求め続けなければならない。問題の現実は堕落を意味する。問題のないことを願ってはならない。“より以上”を求めて生きるには、問題が大事。常に問題意識を持ち続けることが大事な生き方の原理である。問題はロマン。これが第二番目の本物の人間の生き方の原理であります。**

**“より以上”を求めて生きる第三番目の原理は、人間としてもっともっと成長したいという意欲を持って生きていれば本物。持っていなければニセ物ということができる。命というのは本来、成長することを欲求している、望んでいるのが命。生まれたときから放っておいても寝食をするだけで成長する。命は成長することを本来欲求している。肉体的成長が止まれば、精神的成長を求める。それが健全な命の在り方であります。成長することに喜びがある。成長できなければ、生きがいがなくなって、喜びがなくなる。命は常に燃えて生きたい。燃えるものが欲しい。それが命の基本的欲求であります。燃えてこそ人生、感じてこそ人生、命から湧き上がるものがあってこその人生。人間としてもっともっと成長したい、そういう欲求が人間の命の本当の望み。命は完全燃焼を目指している。燃えて生きるというものを求めている。命が一番燃えるとき、輝くときは、生きたいと思っている命が「このためなら死ねる」という瞬間。そのときに美しくも激しく燃える。命が一番喜ぶ瞬間、それは命を燃やして生きることができるものを持ったとき。「このためなら死ねる」というものを持って生きる生き方をするために、我々はもっと成長したいという気持ちを持っている必要がある。**

**人間としてもっともっと成長したいというのは、成長意欲。それは、自分が命を燃やして生きることができるものはなんなのかを求め続ける状態のこと。だけど、大事なことは今自分がやっている仕事、その中に死んでも良いと思えるような価値や意味や値打ちや素晴らしさを見出すのが、プロとして一番大事な課題です。どんな仕事でも意味のない仕事はない、価値のない仕事はない、他には置き換え難い素晴らしさがある。そこに命を懸けて生きるという生き方が大事なんです。それが人間としてもっともっと成長したいという成長意欲を現実化したときの生き方であります。本当に成長したいのなら、今やっている仕事に命を懸けなければならない。**

**今やっている自分の仕事の価値や値打ちや素晴らしさや意味を知らずして、その仕事のプロにはなれない。仕事をする上で一番大事なのは、意味や価値や値打ち素晴らしさを感じること。感じることで命は燃える。そのことによって、人間は人間として成長することができる。成長意欲を形にするためには、今やっている仕事に命を燃やさなければならない。どんな仕事でも死んでも良いと思えるくらいの価値が湧き上がってくる。意味を感じないで仕事をしているということは、意味のないことをやっているとも言える。価値を感じないでやっているということは、価値のないことをやっているんだ。仕事は、価値や意味、素晴らしさを感じてこそ、仕事。それらを感じてこそ、命を懸けられる。そのことによって人間は限りなく成長していくことができる。**

**本物の人間の第二番目の条件、“より以上”を求めて生きる…不完全でありながらも完全なものを目指す。だけど、完全にはならない。それを“より以上”を求めて生きるというんです。人間の人生は限りなく未来がある、無限だ。“より以上”を求めて生きることによって、人間の世界は価値というものが生まれてくる。神様や仏様は絶対かつ完全、動物や植物は不完全かつ有限に存在。人間は不完全でありながらも完全なものを求める価値の世界に存在する。価値の世界には無限に上があり、下がある。人間の住む世界は無限の世界。だからこそ、努力のし甲斐がある。それがゆえに“より以上”を求めて生きる、そこに本物の人間としての姿が実現されることになる。実現するために、理想を持って生きる、問いを持って生きる、成長意欲を持って生きるという三つが、“より以上”を求めて生きるというものの具体的な姿であります。**

**最後の本物の条件は、謙虚さと成長意欲ともうひとつ最後の第三番目がある。これは人間は社会的存在であるというところから出てくる条件になります。社会的存在というのはどういうことか。社会の中で人間が生きるためには、人の役に立つという生き方をしなければならない。それが基本的な課題であります。その中で一番大事な根本原理は、自分の価値は他人が決定するという原則で社会が動いているということ。自分がどれだけ素晴らしい力を持っていても、それが他人から評価されて認められなければ、社会から見たら一文の価値がないのと同様。社会というのは他人から評価を受けて給料をもらえて、生きていける。どれだけ能力を高めても、それが他人から評価されなければ自己満足。現実を生きるためには、他人から評価され、雇ってもらわないと給料を得られない。それが現実社会の実状。社会の根底に働いている厳しい原則は、自分の価値は他人が評価するということ。他人から評価されなければゼロ、生きていけない。そのために我々は人の役に立つ人間になろうとします。また、そういう気持ちを持たないと、社会の中で本物の人間になることはできません。**

**違った言葉で言えば、社会で認められる大事な条件は、人の役に立つことを喜びとする感性。人の役に立つことを嬉しいと思えなければ、社会において成功することはありません。皆、自分が幸せになりたいと思っていて、人の役に立つと言葉では言うが、本当は自分のことしか考えていない…ことが多い。それらを求めている限り、永久に幸せになれない。本物の人間にはなれない。本当に幸せになろうと思ったら、自分の周りの人を幸せにしなければ、自分は幸せになれない。人を幸せにする力をつくらないと、自分は幸せになれないのが社会の現実であります。家族を幸せにしないと、その家の主人は幸せになれない。**

**我々が社会の中で必然的なものとしてやっている仕事はなんなのか。人を幸せにして自分が幸せになるという活動が職業なんです。人を幸せにした対価として入ってくる金銭が給料で、自分が豊かな幸せな生活ができる…そういう構造が職業です。自分が幸せになりたいと思ったら、必然的に人を犠牲にしてしまう。それでは結果として自分も本当の幸せを感じられない。周りの人を不幸にすれば、その影響を自分も受けてしまうので、決して自分は幸せだとは言えない。この社会が持っている厳しい基本原則を形にしたものが職業。社会という舞台の中で本物の生き方をしようと思ったら、この鉄則を忘れてはならない。幸せになりたいと思ったら、まずは人を幸せにする力を身につけなくてはならない。人を幸せにするために努力して獲得した力が自分を幸せにしてくれる。職業というものが、人間に本物の人間としての社会においての在り方を教えてくれて、実現させてくれる。仕事において成功しようと思ったら、まずは人の役に立たなければならない。人に喜んでもらわなければならない。人を幸せにしなければならない。でなければ金銭は得られない。**

**職業というものは、どんな職業でもその仕事に従事する者を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った、本物の人間に成長させようとする力を持っています。どんな仕事でも自分自身を本物の人間に磨いていこうと思い、仕事をしなければなりません。とにかく、仕事というのは人に喜んでもらってなんぼの世界だと。人に喜んでもらえないような仕事の仕方をしていたのでは、確実に会社はつぶれる。注文はもらえない。まずは、人に喜んでもらうことが第一番目の目標であります。仕事は金儲けのためにするものではない、自分自身を本物の人間に鍛え上げるためなんだ。そうするためにはどうしても社会においては仕事をしなければならない。仕事をすることによって何が獲得できるか、それは人を幸せにする力が獲得できる。人を幸せにする力=人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性。そうすれば、自分が本物の人間になったレベルにおいてどんどんお金が得られる。それで自分も幸せになれる。自分自身を本物の人間に磨き上げるということを意識しながら、仕事をしなければなりません。仕事をする目的はお金ではない、自分を本物の人間に成長させること。仕事をしないと社会の中で本物の人間になることはできない。仕事しか社会の中で自分を本物の人間に鍛えてくれる方法はない。**

**なぜ、仕事をしないと本物の人間にならないのか。それは、人間と社会の実態に触れるという体験を命が持たないと、本物の輝きを持つことがありません。人間と社会の実態に触れることが非常に大事な課題である。人間というのはどんなに恐ろしいものであるか、どんなに醜いものなのか、どんなに怖いものなのか、またどんなに素晴らしいものなのか。社会がどんなに恐ろしいものなのか、社会とはどんなに醜いものなのか、社会とはどんなに怖いものなのか、また社会とはどんなに素晴らしいのか。人間と社会の本当の醜さと本当の恐ろしさに命が触れるという体験をもって初めて、人間は本物といえる命に鍛えられていく。**

**人間が本物になるためには、人間の本質・実態に触れなければならない。本質・実態というのは、人間というのはどんなに恐ろしいものあるか、どんなに醜いものなのか、どんなに怖いものなのか、またどんなに素晴らしいものなのかという体験をすることで、実態に触れることになります。社会の本質・実態に触れなければならない。本質・実態というのは、社会というのはどんなに恐ろしいものあるか、どんなに醜いものなのか、どんなに怖いものなのか、またどんなに素晴らしいものなのかという体験をすることで、本質・実態に触れることになります。それによって社会的存在として本物になる。**

**では、我々が人間と社会の本当の恐ろしさと醜さと素晴らしさに触れるためには、どうしたらよいか。そのためには、プロとしての仕事を持って弱肉強食・利害打算の働くこの娑婆社会の中で生活をかけて働く、人生をかけて働く、命をかけて働く、そのことによって我々は人間の本当の恐ろしさ・醜さ・素晴らしさに出会うことがある。その体験をもって初めて人間として実社会を生きていく実力をものにするわけであります。**

**そういう意味で我々は、職業というものを通して自分自身を本物の人間に磨き上げていく、鍛え上げていくという意識を持って仕事に関わらなければなりません。仕事を通して初めて我々は社会と人間の本当の姿に触れることができる。生活をかけて、人生をかけて、命をかけないと本当の人間の本質・実態まで迫るような体験をすることができません。経済社会で言われますが、経営者が本物になるには3つの体験をしなければならない、と。大病を患って死に際を彷徨うか、倒産をするか、投獄されるかのいずれかを体験しないと、経営者は人間として本物になれない、と。実際問題はどれも体験する必要はないですが、それほどに骨身にしみるような体験をしないと、芯ができない。それほどの悲しみ、辛さ、苦しみを味わわないと本物にならない。仕事を通して、弱肉強食・利害打算の働くこの娑婆社会の中で生活をかけて働く、人生をかけて働く、命をかけて働く、そのことによって我々は人間の本当の恐ろしさ・醜さ・素晴らしさに出会うことがある。その体験をもって初めて人間としての本当の生き方を獲得できるわけです。**

**命に痛みを感じるような体験がないと、命に芯が入らない。本当の真剣さは自分のものにすることができない。不幸な体験は命において鍛えられる、本物になる大事な課題になります。いわゆる「これが俺の人生の地獄だった」というような体験を持つことによって、本当に辛い苦しいときに相手のことをわかってあげられるような心を持つことができる。いい加減な辛さしか体験していない人は、本当の地獄のような辛さや苦しみを理解できない、理解しようとする気持ちが浅い。本当の地獄のような体験をすることによって、相手のことを思いやることができる。血の通った温かな心を持って関わってあげることができる。人生最大の道場は、職業だ。職業こそ自分の命を根底から鍛え上げ、磨き上げてくれる唯一のもの。そういう気持ちを持って職業に携わる必要があります。**

**よく人間性を鍛えるために座禅や瞑想をすることもあると思いますが、ある意味で架空の空間です。人間が観念的につくり上げたもの。だから、これらによって得られるものは意識の成長であって、命そのものが鍛えられることはない。悟ったつもりの悟りとも言えます。だけど、娑婆世界の中で職業を通して獲得された悟りこそ、本当に命の根底から人間を鍛え上げ、磨き上げていける悟りである。**

**もうひとつ人間が成長する場として大事なものは、家庭生活です。結婚するまではお互いに相手の良いところしか見ていないことも多いかと思いますが、結婚して一緒に暮らすことで自分のすべてを隠せない。嫌なところも相手に見せてしまう。男は結婚してから相手にいろいろなことを言われて、鍛えられて、磨かれて男になる。男は結婚してから女性によって磨かれて男になる。結婚してから男は女性の真実を知る。女性も結婚して初めて男はこんなものだったのかと、ある意味で失望する。しかし、男によって磨かれて女は女になる。そういったことができるのが家庭生活です。その結果として夫婦喧嘩など問題もありますが、それもすべて自分を磨いてくれる体験だという意識で捉えれば、簡単に離婚をすることもないですし、応えながら成長させていこうという意欲を高める。お互いがお互いによって本物になっていく。そういった成長が家庭によって実現するわけです。辛さや苦しさ、醜さを避けて通ってはならない、それらを体験することで鍛えられ、磨かれていくんだということを忘れてはなりません。残念ながら、多くの方は耐えられずに別れてしまいやすいんですが、それは自らが成長できるその場を放棄している。我々は社会からは逃げられない。その意味でも家庭からも逃げてはならない。生き抜いていこうとするところに初めて成長が獲得できるわけです。逃げては腑抜けになってしまう。人間としての強さも立派さも出てきて、そうして本物が生まれてくるわけであります。**

**人間として本物になるためには、娑婆世界の中で生きていくしかない。仕事を通して、家庭生活を通して自分自身を鍛えていく気持ちが大事である。簡単に放棄して逃げて、楽を覚えてはニセ物になり、腑抜けになってしまう。厳しいけれどもその中で生き抜いていこうとする努力が、人間として本物という輝きが持てる道筋なんですね。とにかく、問題と悩みから逃げてはならない。その中をくぐり抜け、生き抜いていくことによって、命は初めて根底から鍛えられ、本当の真剣さが身につく。苦しみから逃げればニセ物になり、命は鍛えられない。もっともっと我々は現実の醜さも体験して、そこから逃げないで生き抜いていって、自分を磨き上げていく…そういう強い生き方を求めていくような覚悟が必要なんじゃないかなと思います。**

**とにかく、人生には問題と悩みが必要である。問題と悩みがない結婚はない。問題と悩みがない職場はない。あらゆるところに問題と悩みが存在する。問題と悩みがないものを求めてはならない。必ずどういう生き方をしても問題と悩みがある。それが鍛え上げてくれる。逃げないで乗り越えていく…それが本物への道筋であります。覚悟を決めて強い生き方ができる人間に成長してもらいたいと願っております。今日はどうもありがとうございました。**